

## Topic

## 「珠洲市日置地区の医療・福祉実態調査」について

河野 すみ子

1985年の医療法改正にともない、都道府県に地域医療計画の策定が義務づけられ、石川県は88年に「石川県保健医療計画」を発表した。

この「計画」について、筆者が参加している医療・福祉問題研究会（研究者、医療関係者、福祉労働者、学生等で金沢を中心に組織されている自主的研究会）で検討した結果、「計画」と住民の医療要求がかけはなれており、とりわけ住民要求とのギャップが過疎地域に集中して現われていた。そこで研究会では、過疎地域の実態こそ計画づくりの指針にすべきであると位置づけ、過疎地域の実態調査を通じてより具体的に問題を提起していく方向をうちだし、88年より、過疎地域で高齢化がすすんでいる珠洲市日置地区において医療・福祉実態調査を行っている。

珠洲市は人口25,101人、老年人口比率21.5%（91年4月）であり、人口減少が続いている。その市内で最も高齢化が進んでいる日置地区は、外浦に位置し、医療機関も福祉施設もない。医療機関のある飯田とを結ぶ公共交通手段は1日3～4便のJRバスのみであり、日置地区の狼煙から飯田まではバスで約1時間である。研究会では、まず、日置地区に属する3集落の全世帯を対象に住民の聞き取り調査を実施し、その後、それらの集落の一人暮らし世帯と要介護者・入院者のいる世帯について継続的に聞き取り調査をしている。

以下、いくつかの特徴的な内容を紹介する。

調査対象地域には高齢者世帯や一人暮らし世帯が多く、また、すでに転出してしまった空き家が多くみられた。そしてバスによる飯田までの通院は、朝7～8時にでて帰りが夕方になるので、「病院・診療所が遠くて通い

にくい」ことを日常生活で困難なこととして挙げた人が多いが、「これからもずっとここに住みたい」という人が圧倒的であった。

今年2月の調査では、健康を害し一人暮らしができなくなって、子供のところへ引き取られた方が2名あった。いずれも私たちが今まで数回訪問していた人たちであった。2人ともこの土地を離れることをとても惜しんでいたという。また、すでに子供たちが村を出ていき、夫婦二人で暮らしていたが、昨年夫が亡くなり、一人暮らしになった婦人から話を伺った。その人は、海岸へ行って魚介類をとり、山へ行って農作業や山菜とりという「海であそび、山であそぶ」この土地の生活を愛し、なんとかここに住み続けたいという思いが強くあるが、もし、病気になれば子供のところに行くだろうと語っていた。

身近に医療機関や福祉施設がないところでは、健康でなければ生きていけない。ここに住み続けたいという強い気持ちがあるにもかかわらず、いったん自分の身の回りのことができなくなり介護が必要になった時、この地域から去っていかなければならない。これは仕事の不足による若年層の流出とは異なるいわば「もう1つの過疎化」であり、医療・福祉の不備・不足による高齢者等の流出にはかならない。

現在、東京圏への一極集中にともない、過疎地域における人口減少が進行している。こうした過疎地域で高齢者が住み続けるために、信頼できる身近な医療機関とともに、住みなれた地域内に福祉施設の設置が求められている。

（金沢大学大学院経済学研究科聴講生）